

# 貧困とのかたき

——とくに中国の農民運動を中心として——

北 崎 耕 堂

は し が き

中国の農村が、1958年の人民公社の誕生を契機として、現代化路線に沿って今日のような変革を成し遂げたことはいうまでもないことである。中国の人口を約10億人として、その約80パーセント強を占めているのが農村の人口である。したがって、国民経済の発展をもたらす基礎をなすものとしては、やはりなんといっても農業生産が挙げられ、その進展いかんが国民経済を左右することになる。

かつての中国の農村の生活、すなわち解放前の国民党が支配していたころの農民たちの生活は、貧困そのものであったといわれている。当時の農村の生活の実態を資料によって精査してみると、大部分の農民は、わずか5パーセント弱の地主や富農によって搾取され、少なくとも70パーセント以上の農民は貧しい生活を強いられていたのである。この人たちは、当時、貧農あるいは下層中農と呼ばれていたが、この呼称はひとつの階級的な概念であったのである。解放前の農村では、人びとは、経済的地位によって、それぞれ地主・富農・中農（上層・中層・下層）・貧農・雇農に分けられていた。これらのうちで、地主と富農とは、いわゆる農業生産のために労働力を搾取する側の階級である。これに対して、雇農・貧農・下層中農の農民は、ひどい抑圧と搾取とを強いられてきた人びとである。

しかしながら、こうした貧しい生活を強いられてきた農民たちは、決してひと握りの地主や富農の、権力や搾取に屈していたわけではなかった。毛沢東主席が、

「農民がどういう状態にあるかは、わが国の経済と権力の強化にとってきわめて大きな関係がある」<sup>1)</sup>

と述べたために、農民たちは地主や富農から土地の解放をめざして、連帯してきざんとして立ち上がり、1946年には、ついに土地改革がおこなわれて、地主の土地は国家によって没収されて、貧しかった農民たちに分配されることになった。

かくして、土地改革の勝利をえた農民たちは、それまでの封建的な土地制度から解放されて、土地は農民の個人所有制にかわったのである。しかしながら、経済的に豊かになったのは、中農のなかでも中層および上層の農民たちだけであって、貧農や下層中農は、相変わらず貧困から抜け出すことはできなかった。一方では、少数の富裕中農は富農になろうとして懸命

になり、小農経済が両極分化をおこすことは避けられなくなった。これは、中国の農村が土地改革後に直面した重大な問題であった。

政府当局と党中央とは、こうした両極分化の方向にある農村の実態を察知して、富農経済を發展させることはまちがっており、生産の協同化が基礎でなければならないと指導したのである。したがって、中国全土が解放されたのちに、政府当局と党中央とは、農村の資本主義的搾取を制限して、それを消滅させなければならないといって、生産の協同化が先決であると繰り返し、さらに強調しながら農民を指導して、かれらに互助・協同化の道を歩ませ、農業の社会主義的生産関係を一步一步打ち立てていったのである。

1951年12月に、党中央は、

「農業の互助・協同にかんする決議」<sup>2)</sup>

を発表したが、これは、多数の農民に前進の方向を示したものとといえるであろう。この決議は、各地の各級委員会に対して、自発的な意志と相互利益の原則にしたがって、農業生産の互助・協同化の運動を一步一步前進させて發展させるように、農民たちを指導することを呼びかけているのである。その第1歩としては、個人経済の基礎のうえに社会主義の萌芽である集団労働の組織化、すなわち互助組をつくることである。互助組はふつう数戸から10数戸をもってつくられるのが理想とされている。この互助組では、労働のときには互いに助けあって、等価交換の原則で労働力を出しあってその代価を支払うことになっている。

こうして互助組の組織化は進展するのであるが、一方では貧農および下層中農と富裕中農との競争も、しだいに激しくなってくるのである。力関係からすれば、経済的な面などから考えても、10数戸の貧農や下層中農の組織のほうが、富裕中農のそれに押され気味の状態になってしまうことは当然である。そこで、貧農や下層中農に属している人たちは、さらに組織を拡大して、1954年には、生産協同組合を結成して、それを發展させていった。この間に、たたかいは、もろもろの要因によって繰り返されてきたのである。しかしついに、1958年に本論の第Ⅲ章以後において詳しく述べようとするところの、いわゆる人民公社が誕生することになった。

したがって、この論文では、わたくしが1980年5月に訪中した際に訪問した、上海市嘉定県にある城東人民公社の生活の実態を通して、中国農民の今日にいたるまでの「貧困とたたかい」について考察してみたい。

嘉定県は、上海市の郊外の西北端に位置し、人口は約49万人であるといわれていた。この嘉定県には19の人民公社があるが、それらのうちのひとつである城東人民公社は、戸数は約5,000戸で、人口は約25,000人である。公社の組織は、下部に9生産大隊（農業5、工業2、商業1、水産1.）があって、さらに、生産大隊の下部組織として82の生産隊がある。

耕地額積は約1,935ヘクタールで、生産物は耕地の約40パーセントで食糧をつくり、約30パーセントで綿花、残りの約30パーセントの耕地には野菜などを作付けしていた。これはこの地方の主要生産物であるが、そのほかに副業として、牧畜・漁業・茸・菓草栽培、手芸などもなさ

れている。前述の82の生産隊は、ほとんどが農業生産に従事しているということであった。

## I 農村の変革

### 1 封建社会の土地所有

#### (1) 土地改革前の農村

中国、とくに上海市郊外の農村における土地改革は、すでに最初に言及したように、1946年にその兆しをみたのであるが、それ以前の土地所有は、まさしくきわめて封建的なものであった。今日の城東人民公社が耕作している1,935ヘクタールの土地所有をみると、人口の約7パーセントにしかすぎない地元の地主と富農とが所有していた土地は、土地全体の約40パーセントであった。人口の約80パーセントを占めている下層中農・貧農・雇農の所有土地は約25パーセントで、残りの土地は、中・上層中農と市街地に居住している豪商、すなわち、いわゆる不在地主によって所有されていた。

この城東人民公社の第7農業生産隊は、現在43世帯から成っているが、かつては58世帯で一部落を構成していたという。そのうち地主と富農は11戸で、この階層は土地所有という点からみると、部落全体の64パーセントを占めていたことになる。地主は3戸あって、1戸当たりの平均は5.3ヘクタール、富農は8戸あって、1戸当たりの平均は約3ヘクタールであった。これに対して、貧農・雇農世帯23戸の所有土地は、全部合わせても2.7ヘクタールであったということであるから、村の土地全体の割合からすると約5パーセントで、1戸当たり平均してみると、わずかに0.13ヘクタールにすぎなかった。したがって、この貧農・雇農の土地は全部合わせても、地主1戸の土地の半分しかなかったのである。(1950年9月、上海市郊外地区に、区と郷の人民政府がつくられ、郷の下に、昔からある部落をいくつかまとめて管轄する行政村が設けられた)

このように、土地改革以前の中国の農村の生活、とくに貧農や雇農に属している農民たちの生活は、否応なしに貧しい生活を強いられるかたちになっていたことがわかる。そこで、旧中国の農村の諸階級について簡単に述べてみよう。農村の階級には、前述したように、雇農・貧農・中農(下・中・上層)・富農・地主の五つの階級があった。これは、基本的には、生産手段の所有と労働力の搾取との関係によって把握され、固定化されていたと考えることができる。

これについては『毛沢東選集』第1巻所収の「農村の階級分析」のところに、ほぼ次のように述べられている。すなわち、雇農とは土地をほとんどあるいはまったくもたず、生活のために他人から労働力を搾取される存在である。貧農の場合は多少の土地をもっているけれども、それだけでは食ってはいけない。それで、かれらの生活は部分的に労働力を売ってやっとになっていた。中農は下・中・上層の3階層に区分されるので各階層間に多少のちがいはあるとしても、基本的に家族の労働力を燃焼させるだけの生産手段をもっているから、自分も搾取されないかわりに、他人をも搾取しない、また、搾取したとしても、それは、少部分の搾取だけ

にとどまっているという、いわゆる自営だけでやっていける農民たちである。これらの勤労農民が、実は農村人口の9割を占めていたのである。

これに対して、富農と地主は労働力を搾取する立場の階級であった。そのうち、富農は自分でも主要な労働に参加したが、大部分は他人の労働力を搾取して肥えふとっていた。他方、地主は自分ではまったく労働をせずに、他人の労働力を搾取するのみで最大のぜいたくな暮らしをしていた。しかも、地主と富農の二つの階級は、一般的に考えると、農村人口の1割弱にすぎなかったが、土地所有という面においては、土地全体の70パーセントから80パーセントの土地を手中にしていた。そればかりか、土地をわずかしかもっていない農民にこの土地を貸し与えて、苛酷な封建制度のしくみに乗っかっての、予想外の小作料を取り立てていたのである。

したがって、土地改革前は物価が暴騰し、貨幣価値が下落しつづけたので、地主が農民たちから取り立てたのは現物が主になっていたという。こうした現物による小作料は、やがては労働条件の再生産や生産手段の再生産を不安定なものにしていることを意味している。このことについては、中国共産党上海市委員会が主導権をもって、マルクスが指摘したことを基本において指導している。マルクスの指摘によると、

「労働条件の再生産、生産手段そのものの再生産をほんとうに危くし、生産の拡張を多かれ少なかれ不可能にし、直接生産者の生産手段を肉体的最低限度まで押し下げるほどになることもありうる」<sup>3)</sup>

というのである。要するに、富裕な地主が貧しい農民たちの労働力を搾取しているという事実は、以前の封建的な社会に逆もどりしていることを意味していることはいうまでもない。

## (2) 搾取の実態と貧農の生活

搾取としての小作料の取り立てにもいろいろあるが、上海市郊外一帯でなされていたものとしては、次のようないくつかのものがある。

①「包租」あるいは「耕地の借切り」というもので、貧農や雇農に属している農民たちが地主から土地を借りて耕作する場合に、毎年1ムー（約6,6アール）当たりの小作料がきまっていて、豊作、減収をとわずに定額の分は納めなければならない。納めるものはほとんどが米であるが、米のかわりに大豆や綿花を納める場合もある。納める量は土地のよじあしによって米4斗（1斗は約7,5キロ）から1石までのひらきがあって、ふつうの場合5斗から8斗であったというから、この量は1年の平均収量の半分以上に当たっている。しかも、災害のために収穫がなくても地主は強引に小作料を取り立てたので、これらの農民たちは、しばしば一家離散のうき目にあって不幸のどんぞりに追いやられた。

②「分租」あるいは「刈分け」というもので、いわゆる小作料の総額を決めずに、毎年収量のうちの何割かを地主に納めるというのである。この分け方についてみると、地主はただ土地だけを提供するのみであって、原則的にはその他のものはいっさい提供しない。したがって、

種まきから収穫までの労働は農民たちがやるのであるから、種や肥料などの負担がかれらにあるのはもちろんのことである。そして、その収穫物の40パーセントから50パーセントほどを地主がとりあげている。ところによっては、燃料にする作物がらまですべて地主のものになっていた。もしも、地主が種・肥料・畜力などの生産手段の一部、あるいは大部分を出した場合には、農民は、収量の半分以上、多いときには70パーセントから80パーセントの量を小作料としてとりあげられていたという。

③「預租」あるいは「前納後作」というもので、地主の土地を耕作する場合に、前もって小作料を納めておくことをいう。なかには1年から数年分の小作料を支払わされる場合もあった。貧しい農民たちは金がないために借金をしなければならず、こうなるとまず高利貸の搾取をうけることになる。一方、地主は前もって手に入れた小作料を、貧しくて困っている農民たちに高利で貸していたので、農民たちは二重に搾取されていたことになる。

以上は小作料にかかわる地主の搾取であるが、地主階級は、さらに農民たちからしほりとうとして、小作料以外の搾取に血眼になり、いろいろの手口を使ったといわれている。その主なものとして次のようなものがある。

①小作保証金。農民たちは土地の小作権を手にいれるために、まず、地主に一定額の金銭や食糧などを小作権保証金としてわたすしくみである。もしも年末になって小作料が納められないならば、そのときは、地主はその保証金を差し押えてしまう。

②水まし田畑からのとりたて。地主は、実際には1ムーにみたない土地を農民たちに貸し与え、年末に小作料を取り立てるときは、水ましして1ムー分として取り立てた。その程度をみると、地主が土地を小作にだす場合には、0.7ムー乃至は0.8ムーを1ムーとして計算していたという。

③大きな升に大きなおもり。これは、地主が農民たちから名目以上のものを搾取するために用いたやり方であって、小作料をうけとるときには大きな升やおもりで計り、ふつうの計りや升を用いた場合よりも、1石（約75キロ）について5キロから8キロのものを多く手にいれたという。

このように、小作料の重圧やそれ以外の搾取にあえぐ貧しい農民たちは、生産や暮らしに困ってやむなく地主や富農、あるいは悪徳商人から借金をして、高い利子を支払わされていた。その悪徳商人や高利貸の搾取のやり方もさまざまで、ある場合には、地主・富農・悪徳商人は、収穫期を目前にして食糧を買わなければなくなると、搾取する側の階級者は農民たちの貧しきにつけこんで、古米や古麦を高い代金で売りつける。しかも、収穫前で代金が支払えないときには、まだ十分に成熟しない稲や麦をむりやりに安く売らせてしまうという、いわゆる俗にいう「青田買い」をやるのである。こうした地主階級の二重・三重の残酷な搾取のために、農民たちは汗水流して働きつづけても、最低限度の生活さえも維持することが容易でなかった。したがって、多くの貧しい農民たちは借金にあえぎ、財産という財産はすべて失って、一家離

散のうき目にあった農民たちも決して少なくない。

## 2 封建的土地制度の一掃

### (1) 連帯して立ち上がった農民

1949年の5月に上海が解放され、同年10月1日には、長期にわたる封建支配下にあったこの中国も、「中華人民共和国」として新しい中国の誕生をみたのである。その日から、この上海市郊外の農村においても土地改革の兆しがみられ、それまでひとにぎりの地主・富農・悪徳商人の搾取に苦しんできた農民たちは、中国共産党および中央政府の指導のもとに、反動的保甲制度（宋朝から清朝までの封建社会の武装「自衛」組織であって、国民党時代にも反動支配の末端組織として利用され、解放直前まで、都市から農村のすみずみまでかなりいきわたっていた制度）の打破のために立ち上がり、農民たちは協会をつくるために積極的に参加したのである。そして、この農民協会が成立して最初に手がけられた大きな仕事は、一部の持権階級による残酷な搾取の手段となっていた小作料と、高い利子との引き下げであった。

小作料と利子との引き下げが達成されたということは、こうして、解放初期の農民たちが自らの力で連帯して立ち上がり、封建的な搾取に反対する闘争でかちとった、はじめての勝利であった。このたたかいによって、地主階級の威勢がうちくだかれはじめ、農民たちがうけていた搾取もいくらか軽減していった。そして、農民協会の威信と農民たちの階級的自覚が大きく高まっていくなかで、農村の基礎単位の幹部たちが、闘争を通してきたえられていったのである。この幹部養成が達成されるに従って、農民協会の組織はいっそう強固になり、ますます発展して、1950年の暮れには、参加戸数は農家総数の70パーセントから80パーセントにまで達した。こうして、一歩すすんで農民たちを立ち上がらせて、土地改革をおこなうための組織面と思想面との条件がつくりだされたのである。

たまたま1950年の6月、毛沢東主席は、

「だんどうを追ひ、秩序をもって土地改革の仕事をすすめるように」<sup>4)</sup>

と呼びかけた。中央人民政府はこれをうけて、6月の末には「中華人民共和国土地改革法」を公布した。こうして、封建的な土地制度を徹底的にうち砕く闘争が、中国全土にまき起こったのである。

しかし、農民たちのなかでも階層の違いによって、土地改革に対する反応は異なっていた。下層中農・貧農・雇農に属している農民たちは、自給のための土地を持たないか、あるいはわずかしかなかった農民は、過去においてもっともひどい搾取と抑圧をうけていたので、暮らしが苦しかったこともあって、土地改革をいちばん切実に希望していた。そのうえ、中央政府が指導して養成した土地改革工作隊員を農村へ送り込んだので、農民たちは喜びにわいて、土地工作隊員のことを、

「毛主席がわれわれ農民の解放を助けるために派遣された隊伍」<sup>5)</sup>

であると親しみをこめて呼んだという。

これに対して、中層中農の場合はほとんどが自作農であるけれども、土地や金を借りているものもかなりいて、封建的な小作料や高利貸のあくどい搾取をうけているので、この層のほとんどの中農は土地改革を支持した。しかし、土地をかなり多く持っていて暮らしがわりあい安定している一部のものは、土地改革から得るものが大きくないと考えて、われ関せずの態度をとった。土地をたくさん持ち、搾取をおこなっていた富裕な上層中農は、自分を富農としてみられはしないかと内心不安でたまらず、工作隊にはどっちつかずの態度をとって、なかなか近づこうとしなかった。

土地改革は、いわゆる数多い貧しい農民たちが、解放を勝ちとるための革命運動であって、貧しい農民たちを思い切って立ち上がらせ、土地改革を農民たちの自覚的な行動にではじめて、地主階級の根強い反抗をうち破り、この偉大な歴史的使命を達成することが、土地改革工作隊員の大きな責務であった。工作隊員は農村へはいると、中央政府の、

「貧農に依拠し、中農と団結して、だんどりを追い、区別をつけて封建的搾取制度を消滅させ、農業生産を発展させる」<sup>6)</sup>

という土地改革の総路線にしたがって、大胆に農民たちを立ち上がらせたのである。まず貧しい農民たちをたずねて、その苦しみを聞くという活動を通して、革命に対してもっとも強い意志と、勇敢さを備えている貧農・雇農を十分に立ち上がらせ、土地改革のなかで中核としての役割を十分に発揮させるようにした。

## (2) 土地改革後の運動

かくして、土地改革工作隊は下層中農・貧農・雇農に依拠して中農と団結し、農村に存在するすべての反封建勢力とも団結して、地主階級に対する断固とした闘争を共同してすすめた。そのなかで、多数の下層中農・貧農・雇農のなかに、積極的な青年層や婦女連合会の協力者が急速に現われた。

また、工作隊員はその都度農民たちを指導して、農民協会にまぎれこんでいる不純分子を一掃することにより、農民協会の組織を整えて、真に土地改革の執行機関としたのである。農民協会の成員たちは、工作隊の指導をうけながら、さまざまな方法で貧しい農民が今までの苦しみを吐きだして、貧しさの根っこを掘りおこす訴苦運動を推進するように指導した。これは、貧しい農民大衆を立ち上がらせる活動の重要な一環であったが、まさしく血と涙の訴えは農民たちの激しい怒りを呼び起こしたのである。

この訴苦運動が推進されるなかで、貧しい農民たちは、血と涙で綴られたわが家の歴史を思い起こし、地主階級の悪徳行為を糾弾することによって、自分たちの貧困の根っこがどこにあるかを認識し把握していった。こうして、土地改革をやりぬき、この根っこを除去しようという闘志をいっそう強くしていくのであるが、その裏面には党中央の政策と農民協会の指導があったことはいうまでもない。

反革命分子を鎮圧する運動は、貧しかった農民たちをして地主との闘争の高まりを力強く促進した。こうして、農民たちの心を奮い立たせたそのころ、上海市郊外の嘉定県の現在の城東人民公社になっているどの村でも、地主とのたたかいが繰りひろげられていた。

「太陽が輝き、東風の吹きわたる村の広場には、貧しい農民たちが結集して、村に数人しかいない地主を糾弾する大衆集会がおこなわれていた」<sup>7)</sup>

のである。農民たちを残酷に搾取し、財産を隠匿して、土地改革を破壊しようとしていた地主の悪徳行為は、貧しい農民たちの地主階級に対する限りない憎しみとなってあらわれ、これを糾弾する怒りの声はいたるところで高まっていた。

これらのひと握りの地主を糾弾する闘争大会は、いずれの場合でも大成功をおさめ、地主たちの威厳は地にたたき落され、貧しい農民たちは大いに氣勢をあげた。旧社会のなかでは一部の特権階級のためにあざむかれ、抑えつけられ、さんざんしほりとられてきた農民たちがついに立ち上がったのである。

訴苦運動や地主階級の糾弾に成功した農民たちは、農民協会に導びかれながら党中央の政策に基づいて、千数百年のながきにわたって搾取してきた地主をうち倒すことができた。さらに中央政府は、地主階級が農民たちを搾取する道具としてきた土地や役畜、農具などの生産手段を没収し、同時に余分の食糧と家屋を没収した。また、富農や商工業者に貸し出している土地のうち、徴収すべき一部の土地を没収したのである。

中央政府が没収あるいは徴収した土地をはじめ、その他、生産手段に必要なものすべてを農民たちに分配することにした。土地の分配では、以前から土地をわりあい多く借りて耕作している農民には相応の配慮を加え、一般的に農民1人12アールから15アールを分配した。土地をまったく持たないが、あるいは少ししか持っていない農民には、ふつう1人当たり10アールから13アールが分配された。前述した嘉定県城東地区の約4,500戸の農民に、合わせて約1,500ヘクタールの土地とその他の生産手段、家屋、食糧などが分けられた。この分配と同時に、農民協会は「中華人民共和国土地改革法」第10条の規定に基づいて、地主にも同じように土地を分配し、自ら働いて生活を維持できるようにし、また労働のなかで自己を改造できるようにした。

貧しい農民たちは長い年月にわたって、血と汗を注いで切り開いてきた土地をついに自分の手に取り戻すことができた。こうして、土地の分配が始まると、まるで結婚式かなにかの祝いごとがやってきたかのように、

「歌い、踊り、大きな興奮に包まれた」

と、嘉定県革命委員会から入手した資料に記されている。それまで、土地を持たなかった農民が土地を分けてもらい、その証文を手にした農民の多くは、自分の畑に立ってその土を握りしめながら、貧しかった過去をふりかえって、底知れない感動と涙にぬれたのである。



## Ⅱ 農業生産の協同化

### 1 互助組織の生産

#### (1) 労働力の組織化

土地改革の勝利で土地の分配をうけた農民たちは、土地を手にしたことによって、農民と土地、生産者と生産手段とがひとつに結びついたことで、その生産意欲が高まったのは事実である。また、一方では意気盛んな抗米運動が展開されるなかで、農民の愛国主義と国際主義との思想が高まったことによって、農民たちの生産意欲がこれまでになく高まったことも事実である。かれらは、党中央や農民協会の呼びかけに応えて、生産を立派に成し遂げ、生産量は飛躍的に増加した。

土地改革を経て、農民の組織は一段と高まっていった。農民協会は、党中央の指導をうけていっそう大きく発展し、さらに多くの農民たちが参加を希望して、加入農家数は全農家の90パーセントを越えるまでになった。民兵の組織も土地改革前に比べて大きく発展し、しかも、この民兵たちは生産の突撃手であるばかりでなく、土地改革の勝利のまもり手でもあった。そして、前述のように、土地改革工作隊の協力者となった下層中農・貧農・雇農の積極分子が多数あらわれて、農民協会や婦女連合会、青年団、民兵組織の中核となった。土地改革以前の農民たちは、まさしく地主の奴隷そのものであったが、今はどこでも明かるく活気に満ちみちていて、本当に農村の主人公となったのである。

しかしながら、たとえ下層中農・貧農・雇農に属している農民たちが、農村の主人公となったことは事実であるにしても、最初に少し述べたように、小農経済はまもなく両極分化をおこすにいたった。前章第1節の(1)項で述べた現在の城東人民公社の、第7生産隊の過去がそうである。当時、58世帯のこの部落には、役牛は全部で9頭、水車は8台しかなかった。そのうち、牛7頭と水車6台は富農と富裕中農の手にあったので、30数世帯もあった下層中農・貧農・雇農には、土地改革のときには牛2頭、水車2台しか分配されなかったという。

経済力のある富裕中農は、身につけている生産技術や経営能力を生かすならば、その経済的な地位を十分に望むことができた。土地改革の嵐がすぎると、

「家を興し富をきずく」<sup>8)</sup>

という欲望が日ましに頭をもたげてきた。富裕中農は、自分の役牛や水車で下層中農・貧農・雇農の田畑を耕したり、灌漑したりするとき、解放前の習わしに従ってひじょうに高い代価をとりあげた。たとえば、牛1頭の報酬は、人手の4人分から6人分に相当した。水車の代価はもっと高かった。したがって、牛と水車を所有する家は収量の4割をとっていたといわれている。もしも施肥を代行するときは、収量の半分以上をとりたてたというから、それはまさしく代価というより搾取であった。下層中農・貧農・雇農に属している人たちは、こうした徴収の実態に不満を抱き、

「貧乏人はどこまでも貧しく、牛を使うことさえできなかった」<sup>9)</sup>

という。また、

「貧農はただきりきり舞いするだけで、富裕中農のように、牛の後から悠悠と歩くことはできなかった」<sup>10)</sup>

というのである。ちょうどこの頃に、この部落にある10数戸の富裕中農のうち、富農の水準に近づいた家が5戸あったという。いまこれを1人の富裕中農に例をとってみると、この人は最も顕著に資本主義的な道を歩んでいたということが出来る。というのは、かれは以前から繰綿機を持っていて、農閑期にこれで金もうけをしていたが、土地改革後は、自分の田畑は人を雇って耕作させ、一方で実綿を安く買い入れて工場で繰綿をつくった。そして、繰綿に綿くずをまぜ、水をふくませて高値で売って不当な利益をあげたために、かれは経済的には普通の富農をはるかにしのぐ状態であったという。

ここに述べてきたように、このような両極分化はますます高まっていて、下層中農・貧農・雇農に属していた農民たちの生活は、一向に豊かにならなかった。もしもこのような状況の進展をそのままにしておくならば、農業生産を急速に発展させることができないばかりか、国家の工業化のために、日ましに増大する食糧や原料の需要をみたしていくこともできない。しかも、農民たちが土地改革のなかで手にした土地はふたたび失う結果になるかもしれない。そこで、党中央は、1951年12月に、農業生産の互助・協同化の運動を社会革命として推進したのである。

## (2) 闘いのなかの互助組

土地改革以前の貧しかった農民たちは、地主や富農のために働いて体をいためつけられ、さんざん苦勞したが、報われるものは比較的になかったという。富農分子や富裕中農は貧しい農民たちの足を引っぱって、互助組を結成する兆しをみせてきた農民たちの、その足もとを切りくずそうとしたのである。しかしながら、貧しさを強いられてきている農民たちは、決してこれをだまってみてはいなかった。党中央と政府の指導のもとに、労働力がようやく組織されようとしているときに富農分子や富裕中農たちは、逆にかれらの足を必死になって引っぱっていた。そればかりではなく、地主や富農たちは、貧しい農民たちにいつまでも頭をもたげさせず、相変わらずかれらに搾取を強要していたのである。

このことを知った共産党委員会は、地主や富農に従っている少数の中・上層中農に対して、辛抱強くかれらを説得し教育しながら、社会主義的農業の協同化の道を歩むように指導した。結果的にはこの方法が功を奏し、下層中農・貧農・雇農の人たちも共産党委員会の援助をうけて、闘いによって勝利するのだという志気を大いに高め、あくどい富農分子のたくらみをあばいた。したがって、さしもの富裕中農の人たちも農業の協同化により賛同して、階級敵とのたたかいに参加することになったので、早いテンポで労働力が組織されて互助組がつくられ

ていった。こうして、次つぎに周辺の貧しい農民たちが互助組を組織して、農業協同化の偉大なる路線を推進していったのである。

とくに、上海市郊外の城東地区の周辺に組織されていった互助組は、毛主席や共産党中央の革命路線に導びかれてつくられたもので、すでに述べてきたように、下層中農・貧農・雇農という貧しい人たちにたよって、中・上層中農と団結するという階級路線が基本的につらぬかれた。しかしながら、こうした農業協同化の運動の発展にともなって、互助組はたえず強大になったが、一方では修正主義路線の影響をうけて、富裕中農だけの互助組が少数ではあるが現われた。こうなると、たとえ数のうえでは少ないながらも、力関係の差はやがて互助組そのものの性格を変えてしまうか、あるいはくずれ去ってしまうかのいずれかの道をたどることになった。かつて、今日の城東地区の第7生産隊のなかにつくられた二つの互助組（ひとつは雇農・貧農・下層中農を主体としたもの、いまひとつは富裕中農を主体としたもの）は、あまりにも異なった道を歩んだので、両者はひじょうに明白な対照をなしていたという。

こうしてつくられてきた二つの互助組は、それらがたとえ異なった道を歩んだにせよ、互助・協同化運動はますます推進されていったのである。最初に互助組をつくったのは、雇農・貧農・下層中農といったいわゆる貧しい農民たちであった。しかし、互助組が最初から何の苦もなくつくられたのではない。その障害となったのは富農たちであって、ある富農は「雇用の自由」をたてに、高い賃金で人を雇って互助組の成立をさまたげた。その他にも反動勢力の抵抗はあったが、貧農・下層中農の婦女連合会や青年団が積極的に協力して、貧しい農民たちを中核にした互助組がつくられることになった。

1952年の夏には、連鎖反応的に互助組がつけられ、収穫の面でも以前に比べると1.5倍から2倍となって、城東地区だけでも120数組におよぶ互助組ができて、農業生産は次第に組織化されて進展していった。さらに、互助組には集団労働をおこなうときに、役牛や農具を統一的効果的に使用できるという利点があった。しかし、役畜や大型農具の多くは富裕中農の個人の所有になっていたし、そのうえ経営も分散していたので、もしも富裕中農の同意がなければ、組全体の必要に基づいてそれらを統一的効果的に使用することはできなかった。このようなことが、実は互助組の限界となったといわれている。その他にも、土地、労働力、資金といった面においても、拡大再生産の必要に応じるということで限界が生じた。したがって、互助組の限界を知った農民たちは、6世帯から7世帯を1互助組としていたものを解消して、労働力を拡大組織して、集団労働による生産を期待したのである。しかしながら、ここに述べてきたように、生産手段としての役畜や大型農具は、富裕中農だけの互助組で使用されていたので、貧しい人たちの互助組では効果的に使用されなかった。そこで、かれらは富裕中農の互助組を包含して、これをいっそう発展的なものにするために、生産協同組合をつくることを決意したのである。

こうしてできた初級生産協同組合が、絶えず発展していったことはいうまでもない。それま

で小規模な商いを兼業していた農民たちは、店を休業してまで生産協同組合に入りたいと強く願ってきたという。さらに、このことを換言すると、互助組自身のもつ限界が生産力の発展を拘束することになったので、かれら農民たちが集団労働をおこなう場合でも、生産をいっそう発展させるために集団経営をやりたいという方向に変わっていったといえるであろう。このことが発火点となって、多くの互助組は発展的解消にふみきって、自発的に協同組合化の方向に動いていったといえるのである。

## 2 上級生産協同組合へと躍進

### (1) 日和見主義の払拭

初級生産協同組合がつくられて2年目の春、苗づくりの季節がやってきた。生産協同組合では、もみ種を薄く蒔く新しい技術による苗づくりをやってみた。しかし、富裕中農たちは自分の苗づくりの経験を信じていたために、科学的な技術を導入しないで、それまで通りの厚蒔きの方法をとった。早稲の穂に実がはいる頃になると、生産協同組合の稲は青あおと力強く伸びているのに、富裕中農たちの稲は背たけも低く茎も細かった。1955年の秋の取り入れの収量の差で勝敗が決定したのである。こうして、生産協同組合は大豊作を勝ちとることができた。10アール平均の収量は、富裕中農たちの収量よりも150キロ、綿花は22キロほど多くとれた。年末の収益の分配では、労働力1人当たりの平均収入は、富裕中農たちのそれと比較して、約50元はどうわまわっていたという。

かくして、生産協同組合が大豊作を勝ちとったのに対して、富裕中農の場合はむしろ減収になってしまったという。そこで、かれら富裕中農たちは、残存している互助組や単独経営の農民たちに呼びかけて、生産協同組合をつくるようになりたてた。こうして、周囲の富裕中農たちが生産協同組合を次つぎとつぐって、積極的に参加するようになってきた。こうなると、いかに富農であっても敗北を認めないわけにはいかず、ついに、生産協同組合に参加することになった。しかし、参加はしたものどうしても太刀打ちできない富農たちは、生産協同組合に真っ向から反対しても駄目であることを知ると、戦術をかえて内部にその代理人をさがし求めた。代理人となった組合員は、ひと握りの富農や一部の上層中農におどらされて、組合の主任や副主任を抱きこんで、資本主義的経営に近い農業生産に力を注ぎはじめた。たとえば、作付の計画をたてるときでも、党中央や政府が定めた食糧の耕作面積を減らして、野菜などの作付を増やし、収穫した野菜などを売ったその集団の金を山わけしてしまった。こうした一部の扇動者たちによって、資本主義的な傾向の強い富農や上層中農たちは、機会をうまくとらえて商いに熱中しはじめたのである。なかには、あっさりと農業生産をやめて商いに専念する人たちも出て、集団的農業生産に重大な影響をおよぼした。

このことによって、城東地区の生産協同組合もそのなかが掻き乱されて、不穏にしてあやしげな妖気がただよった。しかし、生産協同組合の解体をねらったひと握りの人たちの企ては、

30数戸の雇農・貧農・下層中農が断固として社会主義的な協同生産の道を選んだので、組合の解体を実現することはできなかった。そのみが、雇農・貧農・下層中農に属していた人たちは、党中央と政府の指導をうけて、組合の内部を整えて委員会を再建した。そして、新しい主任には貧農のなかから適任者を推して、この層の協同組合の優位を確保した。新しい指導部は、雇農・貧農・下層中農に属していた人たちの支持をうけて、これまでの誤ったやり方を改めて、作付計画を党中央と政府の要請どおりに実行に移していった。生産協同組合では農業生産にいっそう力を入れると同時に、副業生産も合理的に割りふりしたのである。また、国家からの貸付金500円で生産の準備や組合員の生活面の必要をみたした。こうして城東地区の生産協同組合は、急速にそのすがたを変え、その年に豊作をかちとって組合員の収入を増やすことができた。さらに、国家からの貸付金も返済することができたし、反革命分子の悪徳行為があらばき出されたために、政府のしかるべき機関において法に基づいての制裁が加えられた。

1955年になると、党中央の革命路線に導かれて、農業生産の協同化の高まりが中国全土におよぼうとしていた。しかし、一方では、こうして農業生産の協同化が進展して行くなかで、中央政府のなかに反動的な方針を打ち出すものもあって、生産協同組合を、ばっさりと切り捨てるという事態も起こったのである。当時、中国共産党の上海市郊外工作委員会のなかには、一部の指導者ではあるが、この反動的な路線を執行しようとした人もいた。かれらは、

「①協同組合の発展を停止させ、②組合の縮小に全力をあげて、③組合内の不均衡を整理する」<sup>11)</sup>

という誤ったスローガンを打ち出して、1955年度内には、341の生産協同組合を増やす計画があったそうであるが、反動路線の妨害などもあって、258組合にけずり落されてしまったという。かれらは、運動の発展が基本的に健全であるという事実をしっかりと確認しないままに、そこに現われたいくつかの問題に限りない憂慮の念を示し、現存の生産協同組合がこれ以上多くなれば暴走してしまうとして、協同組合の組織運動をコントロールすることを考えたという。

ところが、右翼的な日和見主義者は農民たちの熱意ある運動を知ろうともせず、耳さえも貸そうとしないばかりか、農民たちの頭上に冷水を浴びせたのである。生産協同組合を縮小するというかれらの誤った方針は、資本主義の自然発生的な傾向のある富裕中農たちにとっては、願ったりかなったりの条件であった。城東地区の現在の第7生産隊の地域でも、地区の指導機関による自由売買の支持がいつまでたっても得られないので、5戸の富裕中農がまず組合を出ていった。しばらく経って、自由売買の許可が出ると、この機に乗じた一部の富裕中農は貧しい人たちをひきずり込んで、10数台の自転車を買って、自分たちで栽培した野菜を売りにいくという商売をはじめた。これらの事実は、右翼的な日和見主義の路線が、ブルジョア階級と農村の自然発生的資本主義勢力との願いを、大きく反映したものであることを立証している。

このことについては、毛沢東主席が「農業協同化の問題について」（毛沢東選集に収録）と題して、次のような論文を発表している。すなわち、

「かれらはいつもブルジョアジー、富農、あるいは資本主義の自然発生的傾向をもつ富裕中農の立場に立って、わりに少数の人のために考えているのであり、労働者の立場に立って、国家全体と全人民のために考えてはいないのである」<sup>12)</sup>

と指摘している。したがって、この右翼的な日和見主義路線は、城東地区においては数多い雇農・貧農・下層中農の人たちの断固とした反対にあって、日和見主義の妖気は打ち払われて不成功におわったという。

こうした相異路線のたたかいが一段落して、1955年の下半期には、それこそ毛沢東主席の主張する革命路線に導びかれて、ここ城東地区の農村にも、社会主義的農業生産の高まりが怒濤のようにまき起こってきたのである。そして、翌1956年になると、早ばやと半社会主義的農業生産協同組合が実現した。しかしながら、既存の初級生産協同組合は土地に応じた収益の分配をおこなっていたので、この土地に応じた分配と労働力に応じた分配とのあいだには、その方法手段において一定の矛盾があった。この矛盾をなくして生産をよりいっそう発展させるためには、土地の私有化をなくし、半社会主義的性質の初級生産協同組合を、完全な社会主義的性質をもつ上級生産協同組合に変えていく必要があった。

## (2) すばらしき躍進

初級生産協同組合を上級生産協同組合に変えていくうえで、大きな問題となってきたのは、私有化している土地から報酬を受けるというやりかたである。これは、なによりもまず、土地を比較的によくもっている富裕中農たちに関係が深いのであるが、農業生産の協同化運動がますます発展するにつれて、労働力に応じた分配の比重は大幅に高まった。このことは、組合員の収入が富裕中農の水準に近づくか、あるいは同じ程度にまで伸びてきたことを意味している。また、初級生産協同組合にすでに入っている富裕中農の大部分は、党中央や政府当局の指導と教育とをうけて、上級生産協同組合が初級のそれよりもよりすぐれており、協同化の進展の道は、階段を上がるように一步一步高まっていくのであるということを、次第に認識し理解するようになってきたということである。

たとえば、城東地区にある初級生産協同組合では、生産協同組合をつくった最初の年、すなわち、1954年の収穫期に労働に応じて分配された総額は12,341元、土地に応じた分配は4,728元で、土地報酬は、労働に応じた報酬の38パーセント強であった。しかも、翌1955年には、この生産協同組合はいちじらしい増産をみることができた。増産になったものは労働に応じて分配する原則がとられていたので、その年の暮れの分配では、労働に応じた分配の総額は33,119元で、前年度の約3倍になった。一方、土地の報酬は最初の年に決めた額面どおりであった。したがって、生産の発展が早ければ早いほど土地報酬の比重は小さくなり、反対に組合員の収入の水準はますます高まっていった。こうした実態をみてとった富裕中農たちはそれまでの態度を変えて、土地報酬のやり方を止めて、初級組合を上級生産協同組合へと発展させることに

賛成するようになった。

こうした飛躍的な躍進のなかで、どの生産協同組合においてもそうであるが、最善の協同化の道を断固として歩んだのは、貧しい生活を強いられてきた雇農・貧農・下層中農の農民たちであった。かれらは、半社会主義から完全な社会主義に進み、上級生産協同組合をつくることを強く希望した。城東地区においても、10組の上級生産協同組合を設立すべく、その設立準備委員会をつくって、組合員たちを率いて上級の協同組合をつくりはじめた。

さらに、城東地区の共産党組織は、農民たちが上級生産協同組合をつくっていくその過程のなかで、雇農・貧農・下層中農に依存して、中・上層中農と団結するという、いわゆる党中央の指針とその政策とをつらぬいたのである。とりわけ党中央と政府とは、雇農・貧農・下層中農に属していた人たちが、社会主義的農業生産を積極的に推進していることを知って、暖かい思いやりと大きな支持とをかれらに寄せていった。さらに、政府は「貧農協同化基金」を設けて出資し、経済的に困難な事情にある人たちに貸し与えて、貧しい農民たちが、上級生産協同組合をつくれるように経済的な条件を整えた。こうして、それまで貧しかった多くの農民たちも、国からの援助を受けて順調に上級生産協同組合をつくることができた。しかしながら、この「協同化基金」に浴しなかった富裕中農たちは、その実態をみて、

「雇農・貧農・下層中農は、国からあと押しされているので腰骨が強い」<sup>13)</sup> といっ

て、羨しがったという。ここにいうところの「貧農協同化基金」とは、貧しい農民たちが生産協同組合をつくって、そのなかで政治的優位を確立して、中農との団結を打ち固めるうえで、経済的な面で大きな基盤となった。また、農業生産の発展を促すうえで大きな意義を持っていたといえる。こうした党中央と政府との行き届いた施策に農民たちは深く感動して、社会主義的な生産活動にいっそう意欲を燃やしていった。

これに対して、ほとんどが単独経営に近かった富農や富裕中農たちには、自発的な意志と、相互利益の政策を確実に実行させた。これらの富農・富裕中農たちは、ここ数年来、農業生産の協同化のすぐれた点をみてきており、また「農業発展要領」（1956年1月、毛主席が主宰して定めたもの）の宣伝を通じて、富農・富裕中農の人たちも社会主義的農業生産がすぐれていることを知っていた。したがって、上級生産協同組合づくりの大きな流れが押し寄せてくると、それに引き込まれて加入するものが多くなってきた。こうして次つぎにつくられてきたこの上級生産協同組合では、組合員の自発的な意志と相互利益の政策を正しく実行して、富農や富裕中農と団結するために、生産手段の効果的使用について協定した。また、それまで富農や富裕中農の私的所有となっていた役牛や大型農具などについても、その買い上げに当たっては民主的に価格を評価して、理にかなった方法で公平に処理したのである。

上級生産協同組合は、初級の組合と比較して資金を割りあい多くもっているの

上級となったその年に、その他の協同組合と同様に主な生産手段を大幅に増やした。たとえば、農業用船を2隻から5隻に、脱穀機を3台から12台に、水車を18台から24台に、撒粉器を0台から8台に増やしたのである。このほかにも、国家からの支援を受けてかなり大型の基本建設を進め、電力灌漑ステーションをつくって、組合の耕地の約50パーセントに灌漑できるようになった。

上級生産協同組合は、その規模や公有化の程度が、初級のころより格段のちがいをもっていたので、生産手段・労働力・土地を統一的かつ効果的に使用することができた。城東地区の上級生産協同組合では、改めて生産隊を編成しなおし、土地を整理・統合して、初級時代の、「土地はとびとびで、組合員は行ったり来たり」<sup>14)</sup>

といった状況を改めるとともに、組合内の水利や土地の改良についての長期計画を作成した。また、組合員の生産技術や経験に基づいて仕事を分け、綿花、食糧、野菜などの作業班をつくって、各自が能力をつくして働けるようにしたのである。同時に、温室4間、低温室5間、豚小屋21間を管理するのに必要な技術要員も確保した。現在の第7農業生産隊の組合では、野菜を主として作付していたが、1956年に襲ってきた災害のなかでも、上級生産協同組合の優越性と組合員の努力とによって、平年並の収量をあげることができたといわれている。

1957年の整風反右派運動（1957年8月に、共産党中央が全農村に指示したもので、その内容は党内に存在している右の思想を批判して、一部の富裕中農の資本主義的傾向を批判することによって、社会主義路線に攻撃を加える地主・富農・反革命分子の破壊行為に打撃を与える運動）と社会主義教育運動（社会主義と資本主義の二つの勢力の格闘がくりかえされているなかで、社会主義こそ働く農民が搾取と貧困から抜け出す唯一の活路であるとする運動）とは、ひじょうに強力となり、城東地区の農村の上空に一時期たれこめていた黒い雲を吹き払ってしまったという。さらに、この地区の組合の幹部と組合員たちとは意気込みに燃え、1957年の冬から1958年の春にかけて、それまでにかつてなかったような、大がかりの水利工事がおこなわれたのである。

### Ⅲ 人民公社の誕生

#### 1 コミュン形成

##### (1) 公社組織の光し

城東地区の雇農・貧農・下層中農に属している農民たちは、前述したように、1957年の整風反右派運動の勝利と、社会主義教育運動の意欲的な取り組みとによって、新たな目標に向かって進みはじめた。かれらは、上海市郊外のその他の農民たちと一緒に、1ムー当たり50キロの綿花、500キロの食糧、5,000キロの野菜を収穫することができた。この高収穫に気をよくしたかれらは、全国「農業発展要綱」の生産目標に従って計画を立てて、社会主義的農業生産を進展させるために、大きな貢献をしようと申し合わせたのである。そして、その目標を実現させ



るために、城東地区の13の上級生産協同組合は、1958年1月にそれぞれの郷村の共産党委員会の指導をうけて、まれにみる厳寒をものともせず、それまでに見られなかった大規模な「水利の闘い」の火ぶたを切った。

この水利の闘いは、いうまでもなく雇農・貧農・下層中農の農民たちの、社会主義的農業生産に対する積極性の新たな高まりであった。水利工事の現場は、昼夜を分かたず熱気に湧きかえり、

「昼は一面の人の波、夜は一面の灯の海」<sup>15)</sup>

であったという。春節(旧正月)が間近に迫ったころ、この貧しい農民たちは古いしきたりを打ち破って、新しい気風をみなぎらせ、

「29日ぎりぎりまで水利工事をやり、正月のだんごを食べたらすぐまた仕事にとりかかう」<sup>16)</sup>

というスローガンを打ち出して、ひとたび計画したことは、かならず実行するかれらであった。大晦日の前日まで河川に入って工事をおこない、元日の朝は夜明けまえから雪を払って仕事を始めるという、いわゆる革命的精神にあふれた春節を送ったのである。その結果は、城東地区の第7農業生産隊を含んだ周辺の郷村だけでも、291本の水路が堀りかえされ、泥のつまった汚い溝が澄みきった水の流れる河川となり、黒ぐろとした川底の泥土は田畑に敷き詰められていった。

かくして、城東地区の農業生産の大躍進の序幕は、年のはじめの「水利の闘い」によって切って落されたといってよい。こうした全面的な躍進のなかで、どの上級生産協同組合においても早魃に打ち勝つ能力を高めようとして、人びとは、人力や物力を農業の命脈である水利事業に集中していった。そのために、腕や技術のある者を集めて新しい灌漑用具を試作して、灌漑がおこなわれやすいように河川を整備した。また、いくつかの生産協同組合が投資して、灌漑ステーションを造ったのである。

城東地区の上級生産協同組合では、この年のはじめの大きな水利工事以来、志気をいっそう高めて意気込みをさらに強めていった。それまでは手をつけかねていた稲の二期作も、かならず成功するという確信をもてたということもあって、収量の面ではいちじるしい進展をきたしたのである。このように、これまでに試みられたことのなかったことにも手がつけられたので躍進の情勢がいちじるしく現われてきた。これは、ひとり城東地区の組合のみならず、どの協同組合においても、さまざまな事業を新たに起こす計画がなされた。その最初のきっかけとして取り組まれたのは、農具を大型化することと、革新運動を積極的に進めるということであった。この新しい農具の試作の成功に励まされて、多くの人たちが技術革新に乗り出したのである。

農具の革新が先頭をきったのに続いて、1958年7月の中旬に、城東地区の農民たちと組合の幹部たちは、申し合わせたように、

「工業、農業、商業、教育、軍事は躍進に躍進を重ねて躍進しよう」<sup>17)</sup> というスローガンのもとに、大いに張り切って各方面の仕事に取りかかった。こうして、まさに駿馬の大軍に似た全面的な大躍進のきっかけが作りだされていった。とくに、農業生産の「八字憲法」(1958年、毛主席が中国農業の経験を締めくくって制定した科学的な農耕の綱領で、八字とは、土＝深耕と土壌の改良、肥＝肥料、水＝水利、種＝良種の育成、密＝合理的な密植、保＝作物の保護と病虫害の防除、工＝工具の機械化、管＝耕地の管理の八項)が農民たちの間に深く根をおろしはじめて、農業生産の発展を力強く導びいた。

多くの雇農・貧農・下層中農の農民たちが、社会主義的農業生産を希望するのは、貧しかった過去の歴史からくるものであって、誰もこれをはばむことはできなかった。こうして、主生産の農業はもちろんのこと、その他の副業や関連企業においても、大きな足どりで前進することができたのである。しかしながら、生産力が躍進に躍進を重ねて急速に発展してくると、これまでの上級生産協同組合の組織形態では、どうしても生産力に適應できないという矛盾が次第に起こってきた。もしもこうした矛盾を押して生産力を躍進させるためには、農地の水利工事や交通輸送の改善をはからなければならなかった。しかしながら、いざ実行に移すとなると、上級生産協同組合のもとでは、関係するいくつかの上級組合の間で、それぞれに異なった利害関係を調整するのがひじょうに困難であった。そのために、組合の幹部たちは周辺の組合の幹部たちと協議して計画を立てたが、実現できないことが多かったという。

こうした空まわりの計画を繰り返さないで生産を躍進させるためには、どの生産協同組合でも、各種の大型農具や農業機械を購入する必要があった。しかし、上級生産協同組合の規模では、やはり資金も少ないので、ひとつの組合では大型の機械を買うだけの力はなかった。城東地区の上級組合では一部の大型農業機械は購入したものの、1台のトラクターさえも買うことができなかった。買えない理由としては、資金が少ないということもさることながら、土地が分散しているために、大型機械を効果的に使用することができなかったということもある。たとえば、城東地区の小規模の上級組合では国家からの貸付をうけて、1台で67ヘクタールの水田を灌漑できるポンプを買うことができた。しかし、この組合では17ヘクタールあまりの水稻しか耕作していないために、何時もポンプは遊んでいたという。これでは、結局のところ浪費に終わったということであって、経済的には、むしろ逆戻りのかたちとなったのである。また、国営のトラクター・ステーションから大型のトラクターがやってきても、田畑が狭小のためにトラクターが回りにくくて、そのために片すみへと押し上げられた土をまた、人手を使って平にしなければならないということで、まさに非合理そのものであった。それはまさしく、大型農具を効果的に使用して生産を高めて躍進するという目標とは相矛盾するものであった。

それだけではなく、農業生産の発展に大きな役割を果たしてきた社会主義的集団経済の上級組合も、農業生産が大きく発展するにともなって、生産力の進展に適應しないという矛盾が生じてきたのである。そこで、この矛盾を解決する方向をどこに見出せばよいかが問

題となって、上級組合の幹部と農民たちは、この問題について真剣に思いをめぐらした。

こうした農業生産の大躍進の高まりのなかで、上級生産協同組合に存在している矛盾を感じとって、この矛盾の解決方法を最も真剣に探し求めているのは、いうまでもなく雇農・貧農・下層中農といった、いわゆる積極的に社会主義路線を推進してきた多くの農民たちであった。たまたま毛沢東主席が、

「人民公社はすばらしい。その人民公社のよい点は、工業・農業・商業・教育・軍事をひとつに結びつけることができるので、指導しやすくなることにある」<sup>18)</sup>

と指導したこともあって、党中央は、農村に人民公社をつくる問題について、中国共産党中央委員会は決議し採択したのである。やがて党中央の指示が城東地区に伝わると、組合の幹部や農民たちは、この「人民公社」（この人民公社の「人民」は中華人民共和国、人民政府の人民をとったものであり、「公社」は、1871年のバリ・コミューンから考え出されたものであるといわれている。1958年8月6日に毛主席が七里営を訪問したとき、農民大衆のこの創意に「人民公社はすばらしい」と熱情込めて支持したことに始まる）こそ上級生産協同組合の矛盾と限界とを解決するものとして、人民公社を結成するために力強く第一歩を踏み出したのである。

## (2) 農村の新しいすがた

中国共産党の上海市委員会の直接指導のもとに、嘉定県内の上級生産協同組合および生産隊の幹部全員が集会をもって、七里営人民公社（中国中部の平原地帯で、黄河の北方40キロの鄭州の北部に位置する。1958年に、七里営の近郊38村合わせて56の上級農業生産協同組合が、躍進の高まりのなかで合併して、生産上の必要から製粉工場やボール・ベアリング工場の経営にも乗り出した。また、以前は郷政府の管轄下にあった学校や商店、民兵組織などもその指導下においたこの新しい組織は、もはや農業生産単一の組織ではないところから、それにふさわしい名前をとということで考えだされたのが七里営人民公社）の見学を終えて帰ってきた幹部の報告を聞いた。その報告を聞いた幹部たちは人民公社のすばらしさに感動し、その場で組合員を代表して人民公社を造りたいと願い出た。こうして、七里営人民公社の見学報告集会在、ただちに嘉定県内の「人民公社設立準備委員会」となったのである。この喜ばしいニュースがまたたくまに城東地区のすべての組合員たちに伝わると、農民たちは勇んでこれに共鳴した。

しかしながら、人民公社を造ることに共鳴した農民たちとは裏腹に、一部の階級敵といわれている悪質分子は騒ぎたてて、躍起となって、

「人民公社ができると、みんなの財産は残らず公共のものにされる。今のうちに現金化して自分で使った方がよい」<sup>19)</sup>

などと、悪意にみちたデマをとばして扇動した。農民たちは、こうした一部の悪質な破壊行為に負けてはならないということで、かれらに闘いを挑んだのである。ところが、この城東地区にまもなく人民公社が設立されようとしていた矢先、秋の実りを目前にした8月下旬に、風速

20メートルをこえる台風が、600ミリという大雨をもたらして農作物をおびやかした。しかし、農民たちと人民公社設立準備委員である組合の幹部とが打って一丸となり、ずぶ濡れになって台風と水害とに立ち向い、生産を立派にやり抜いて人民公社を設立するという、固い意志を表明することになった。

台風と水害との闘いに打ち勝った農民たちは、一部の階級敵と称されていた悪質分子の妨害をはね除け、人民公社の発足を熱心に準備した。こうしたさまざまな闘いのなかにも人民公社設立準備委員会は、上級組合や生産隊の幹部を組織して、人民公社設立について党中央によって指示されたことを学習した。こうした準備委員会の呼びかけによって、農民たちは人民公社の性質、方針、政策について学習を深め、繰りかえし討議を重ねていった。続いて、人民公社への参加を申し出る大衆的な行動の高まりが現われた。その間わずかに1週間であったが、情熱的な発展の成り行きとして、そこに客観的条件と主観的な条件とが十分に備わると、当然のこととして、公社組織の気運がもり上がってきた。

1958年9月21日、この日は城東地区をはじめ、上海市郊外の農民たちにとって忘れることのできない日となった。それは、待ちにまった人民公社が誕生した日だからである。このことについて、城東地区に人民公社が発足した日の1日の様相を、嘉定県革命委員会から入手した資料にもとづいて述べると、

「人民公社の成立宣言大会は午後3時からとなっていたのに、12時を過ぎると、1万をこえる社員たちが各村村からあい次いで出発した。白髪の老人、晴着を着た若い娘、歩兵銃を背負い自転車にまたがる青年民兵もいた。72歳になる老婦人社員は、2時間半も歩いてきたというのに、疲れもみせず、(中略)人民公社のことを思うと、ますます元気が出て、楽しそうに民謡を歌うのであった。

めでたさに足もかろやか

こころもはずむ

今日は人民公社のお祝いの日

毛主席のご恩は忘れはしない

おばあさんがこの歌をくりかえし繰りかえし歌うと、そのたびに、人垣のあいだから歓声が上がった。(中略)

赤旗や人民公社成立のプラカードを押し立て、大きな決意書をつづぎ、竜のおどりをくねらせ、獅子舞いを舞いながら、社員たちの列は会場へと向かった。

午後3時会場の議長壇から「親愛なる同志の皆さん、われわれが久しく待ち望んでいた人民公社が、今日正式に成立しました」という力強い声が響きわたった。このとき、会場には天地をゆるがす歓声と、ドラや太鼓の音が湧きあがり、爆竹が鳴り響いた」<sup>20)</sup>

と記している。こうして、新しく生まれた城東人民公社は、至る所で活気にあふれていた。

1958年10月の末、人民公社の社員(かつての雇農・貧農・下層中農を中心とした農民)たち

は、公社が成立してのち、最初の秋の農繁期の仕事に取り組んでいた。男も女も鎌をふるい、たがいに競争し合いながら喜喜として働いた。腰を伸ばし額の汗を拭いて、四方に広がる田畑を見渡すとき、社員たちは、

「この見渡す限り広がる耕地も、エンジンの音とともに走るトラクターも、みんな人民公社のものだ」<sup>21)</sup>

と心のなかで叫ばずにはおれなかったという。

この人民公社の特徴といえば、①に大、②に公（「大」＝人民公社の規模が、以前の上級生産協同組合よりはるかに大きい。「公」＝公有化の程度が上級組合のときより高い）という点にある。城東人民公社は、早速公社級の土地所有と大型農機具との所有制度をつくった。それは、主としてトラクター・ステーション、電力灌漑、排水網、公社経営の工場、大型の牧場、気象ステーション、放送設備など、上級生産協同組合のときには造れなかったものをつくり、その他の企業や事業を公社単位で起こしていった。とくに、人民公社が政社合一（政権と経済組織をひとつに結びつけたもの）となったので、党中央は国家の幹部を人民公社へ派遣して指導力を強め、国家が資金を投入して、電力灌漑、排水ステーションなどをつくって、それを公社が管理して使用できるようになった。かくして、公社級の集団耕作や集団経済は、社会主義的な国家所有性の要素を運びはじめた。

城東人民公社は、工業、農業（林業・牧畜業・副業・漁業を含む）、商業、教育、軍事を統一的に指導できる点で上級生産協同組合の範囲をこえていた。それは政社合一、つまり、社会主義社会の農村の基礎組織であると同時に、プロレタリア階級の独裁的な国家権力の、農村における基礎組織でもある。人民公社の統一的な組織のもとで、労働力と生産手段とが以前よりも合理的かつ有効的に使用され、すべての積極的な要素を効果的に動員することができたので、その年の秋に、農作業の目標を見事に達成することができた。

## 2 健全なる組織と体制

### (1) 集団所有制

上海市郊外に、この人民公社が誕生してまもなく、その強大な生命力をいかんなく発揮した。しかし、この新しく成立した人民公社は、なお闘争のなかで絶えず打ち固められ、より完備されたものにならなければならなかった。成立したばかりの城東人民公社には、出来合いの定款などはなく、また、あり得なかったばかりか、経営の経験はなおのこと不足していた。生産手段を決める場合に、どの級を基礎にした方が適当なのか、収益の分配はどうすればより合理的なのか、公社や生産隊の規模はどれぐらいであるのが望ましいか、公社と生産隊との関係はどのように処理するのかなどの、一連の新しい問題の解決に迫られていた。自分たちの連帯した力でもって、城東地区の大地に人民公社を築き上げた農民たちとその幹部は、党中央と人民政府の指導のもとづいて、自信にあふれた闘争の実践のなかで経験を積み重ね、限りない前

途を持っているこの社会主義的農業生産である人民公社は、連帯と組織をいっそう育くみ強めて、大きく成長発展させようと努めたのである。

このようなときに、人民公社の誕生を阻止しきれなかった党内のブルジョア階級の人たちは、「共産風」を吹かしはじめた。かれは、新しい情勢のもとで反旗をかかげ、誕生したばかりの人民公社を迷路へ引き込んで、党中央と人民政府の革命路線を破壊しようとたくらんだ。公社の幹部と人民大衆は、社会主義の建設を早めたいと願いながらも、公社運営の経験においても不足したので、そこにつけ込んだブルジョア階級は、人民公社の性質を歪めようと躍起になった。その主張は「集団所有制」と「国家所有制」との区別を混同させ、社会主義と共産主義との区別を混同させて、人民公社は「すぐさま全人民の所有制に移行する」とか、果ては「共産主義に入る」などと勇気づけをしたのである。また、かれらは商品生産と価値法則とをなくしてしまうのだといって、①には平均（反革命的修正主義者たちが、農村の社会主義革命の進展を妨げるために極左のすがたで現われ、各生産隊の差異を無視して分配の平均化をはかった）、②には調達（生産大隊や生産隊の財産を公社級に無償で調達する）を大いに進めて、人民公社の切りくずしをはかった。

さらに、かれらが巻き起こしたこれらのよこしまな風潮は、公社の人民大衆の積極的な取り組みをくじき、人民公社制度と集団経済を損ねさせ、正常な農業生産を破壊して人力や物力の重大な損失をまねいた。このため、基礎組織の幹部や社員たちの激しい不満を呼び起こして、このような逆流に抵抗しながら、無償の調達に反対して、勇敢に立ち上がることを決意した。こうして、勇気を出して立ち上がった幹部や社員たちは、

「集団経済を発展させるのに、一部を犠牲にして他を強めることなどできるものか、人民公社は高いビルを建てようというのだから、まず基礎をしっかりと打ち固めなければならないのに、どうして生産隊の土台を切りくずすことができよう」<sup>22)</sup>

と、かれらはいうのであった。城東人民公社の第7農業生産隊でも、公社から肥料を無償で調達にきたとき、生産隊の幹部と社員とは、

「党委員会や人民政府は高い収穫を呼びかけているのに、肥料まで調達されて、われわれはどうやって高収量を勝ちとればよいのだ」<sup>23)</sup>

といって断固として反対した。1958年12月、毛沢東主席が自ら主宰して、共産党第8期中央委員会第6回総会を召集した。この総会で「人民公社についての、若干の問題に関する決議」を制定した。この決議は、中国農民が人民公社を創建した経験を締め括って、人民公社の発展の方向を明らかにしたものである。この決議が意味するもうひとつの意図は、前述したように、一部のブルジョア階級たちがなんの根拠もなく、農村の人民公社は「すぐさま全人民所有制に進む」とか、また、それが「ただちに共産主義の社会になる」などと宣伝した、出鱈目なやり方を厳しく批判した。党中央の指導者側は、

「反動一味のデマは、一種の軽卒さの現われであるばかりでなく、人民の心中にある共産

主義の偉大な理想をゆがめ、風俗化、小ブルジョア的な平均主義の傾向を助長し、社会主義建設の発展にとって不利である」<sup>24)</sup>

と鋭く批判した。また、一部の反動一味は時機尚早に「共産主義に入ること」を計画するとともに、時期も考えないで、商品生産と商品の交換を廃止して、早すぎることを承知しながらも、商品、価値、貨幣、価格の持つ積極的な作用を否定しようと計画しているが、このような考え方は社会主義建設の発展にとって不利であり、したがって、これらの計画が正しくないことをはっきりと指摘している。

1959年の2月に、党中央はふたたび政治局拡大会議を召集して、この会議で「共産風」の誤りをさらに批判して、農村の各級の党組織が断固としてこの誤りを正すように要求した。この会議は、また、人民公社は当面は級に分けて管理をおこなって、級ごとの独立採算制を取るなかで労働力に応じた報酬を分配して、多く生産した者には、それに応じた報酬を分配することを原則とすべきであるとはっきり指摘した。その後、党中央は、公社の社員個人や集団が「共産風」のなかで損害をこうむった場合には、それを調達した級単位で、責任をもって弁償しなければならないと指示したのである。

党中央のこの指示は、闕いのなかで前進している多くの社員と幹部にとってこの上ない励ましとなった。城東人民公社の共産党委員会と管理委員会とは、1959年のはじめに、党委員会拡大会議と社員代表者会議を相次いで開催し、党の第8期中央委員会第6回総会の決議を伝達して討議した。これと同時に、冬季・春季の生産と結びつけながら、人民公社を整頓して強固にする仕事、すなわち人民公社を整頓する整社工作をはじめた。人民公社は3月のはじめ、作業班長を含む2,000人あまりが参加する四級幹部会議（人民公社、生産大隊、生産隊の三つのクラスの幹部および生産隊の班長クラスが参加する会議）を開いて、政治局拡大会議の精神を真剣に学習し、前段階の人民公社の整頓工作进行を点検した。城東人民公社の社員と幹部とは、人民公社についての若干の問題に関する決議および政治局拡大会議の精神を学習することによって、社会主義的性質を持っている、人民公社の制度について大きく認識を高めることができた。

この四級幹部会議等の会議で確認されたことは、人民公社は「二つの移行」を実現する、もっともよい組織形態であるということであった。そのひとつは共産主義を実現するためには、まず社会主義を立派につくりあげることであり、もうひとつは国家所有制に移行することである。そして、そのためには、まず集団所有制の経済を立派に打ち立てなければならないということ、参集した人たちはみな深く体得して確認することができたのである。

## (2) 生産関係の調整

会議に参集した社員たちと幹部とは、認識を統一した基礎のうえに、城東人民公社は、生産手段の三級集団所有制を実行した。そして、当時の具体的な状況にもとづいて、基本的な採算

単位を生産大隊に置いた。さらになお、この管理体制にふさわしく位置づけるために、人民公社および生産隊の管理機構を建てなおしたのである。こうして、採算単位となった生産大隊は、かつて上級生産協同組合のころに経験したことのある生産隊に対する「三包一獎」（仕事、収量、原価を請負わせるという責任制が三包、奨励制がひとつ……の制度を回復させ、生産隊は生産責任制度をつくって、労働と生産の管理を強めていった。また、城東人民公社は、その下部組織から吸いあげた公共積立金のうち、約30パーセントに当たる830,000元を九つの生産大隊におろして、拡大生産の資金源にしたのである。それ以外に、100,000元を82の生産隊に生産資金として支出した。また、それまで公社が所有していた公益金175,000元のうち、50パーセントを生産隊に、20パーセントを生産大隊に渡して管理させ、公社には30パーセントを残した。

かくして人民公社は、党中央や政府の指示に従って、生産大隊や生産隊から調達した労働力、土地、家屋などについてもこまかく処理した。まず、調達していた労働力については、出来るかぎりもとの所属単位に返すとともに、一定の労働報酬を与えたのである。それ以外のものについては、①現物で返す、②実物で精算する、③借用の形をとる、④賠償を支払う、という四つの方法をとった。

こうして、この1年来、公社クラスの経済は無から有へと発展していった。1959年の農業の生産額は2,497,600元に達し、人民公社の三級（公社・生産大隊・生産隊）の経済全体からして、同じ年にあげた総生産額の29パーセントを占めていた。とくに、工業の生産額は飛躍的に進展して、前年度の約2倍の2,219,600元の収益となっている。商業の場合でもそうであり、商品小売総額は前年度同期のそれと比べて、約25パーセントの伸びをみせ、綿ギャバや毛糸製品といった主な品目の売上金は、いずれも大幅な伸びをみせている。解放前の農民たちは、貧しさのために衣食にもこと欠いていたのに、公社経済となった途端に、分配される報酬は予想以上に増えたので、その暮らしは安定して良くなったという。

城東人民公社は、こうした激しい階級闘争と貧困との闘いを経て、貧しさを強いられてきた農民たちは、党中央や政府の指導のもとにすべてに勝利をおさめて、1960年代へと足を踏み込んだ。それは、土地改革の年からすると10有余年、プロレタリア階級闘争という新しい形態に入ってからでも、すでに5カ年の歳月が経っている。こうした農民たちの闘いの実践は、正・反両面から多くの有益な経験と教訓をもたらし、これらの経験と教訓とを真剣に締め括ることによって、人民公社を一段と発展させ、強大なものとするためには、生産関係の調整がきしめまった問題となってきたのである。

この人民公社が成立したときから、その成長を見守ってきた指導的立場にある党中央は、この数年間に重要な指示を次つぎに出して、新しく生まれた生産形態が健全なものとして発展するように導びいた。1961年のはじめ、党中央が主宰して「農村人民公社工作条例」（つまり、1961年6月に補足・改訂された「六十条」で、党中央は、翌年の2月に人民公社の基本採算単位を生産隊に置くことを決定した。その後、同年9月の中国共産党第8期中央委員会、第10回



総会で採択された「六十条」のなかに書きこまれた)を起草した。これは、農村人民公社の綱領的な文書であるといわれている。とくに、この「六十条」は1958年以来、中国の農村人口が約8億人といわれているなかで、約80パーセントを占めている勤労農民大衆が、人民公社を成立させたその経験を締め括って、農村人民公社の当時の性質、組織、規模、所有制、分配制度、各級の職責、経営管理、内部の関係、党の指導などについて、一連の明確な規定をおこなったのである。

生産隊を基本採算単位とするこの「六十条」の政策を実施するうえで、もっとも重要なことは、基本的な採算単位を生産隊に位置づけをするということであった。これは、城東人民公社の生産関係のあらゆる面に関係してくる問題であった。その第1は、生産手段の所有制の問題であった。もともと、生産大隊を基本的な採算単位としていた城東人民公社は、土地、役畜、大型農具などの生産手段をすべて所有し、労働力も統一的に管理して、生産も統一的に指揮していたのである。これは、まだ生産力の水準があまり高くなかったので、それぞれの生産隊の具体的な条件の違いがかなり大きく、生産がまだアンバランスであった当時の状況のなかで、いくつもの矛盾を生み出していた。それは当然のことで、その生産隊内の状況を誰よりもよく知っており、人材、時期、土地などをよく生かして生産を発展させることができるのは、生産大隊ではなくて、一段下部クラスの生産隊であった。

こうした実態を認識した社員と幹部たちは、党中央の指示に従って、基本的な採算単位を、生産大隊から生産隊におろしたことによってその矛盾も解決された。それ以来、生産隊は独立採算制をとったので、損益の責任を自分でとらなければならなくなった。このように、生産隊が生産の自主権と収益の分配権とをもって、生産を直接に組織して、単独で分配をおこなうようになったのである。それと同時に、生産隊の範囲内の土地(河川・池の水面も含む)は、すべて生産隊の所有となって、役畜、農機具など使用に適するものはすべて生産隊の所有となった。そして、労働力も生産隊が管理したので、公社や生産大隊が勝手に引き抜くことはできなくなった。この政策の実施は、多くの社員や生産隊の幹部から、熱烈に歓迎されたという。

基本的な採算単位を生産隊に確定するということは、人民公社成立以来の大きな内部関係の調整であった。しかしながら、生産隊を基本的な採算単位とするのは、当面の生産発展の状況に合致したものであって、決して生産隊だけの一級所有制をつらぬくというのではない。その理由は、生産隊では大型農業機械を購入することは困難であるし、よしんば、より上級からの借入金で購入できたとしても、生産隊の範囲では十分にその役割を発揮することはできない。したがって、統一的効果的に大型農業機械を使用するとすれば、前述したように、人民公社、生産大隊、生産隊の三級所有制を本質的形態として取らざるを得ないのである。このことによって、公社級の機能は主として、生産大隊ではとてもやれない大型の農地の基本建設工事や、公社経営の工業、企業、事業を営んで、農業と公社全体の集団経済に奉仕する。生産大隊の場合は、生産隊ではとても買えない農業機械の購入と、使用に関して調整するというこ

る。そして、生産隊クラスでは述べてきたように、内部関係の調整と、人民公社の優越性とをより十分に発揮させ、社会主義的農業経済の発展を目指すものでなくてはならない。すなわち、人民公社の生産隊を基礎とした三級所有制度は、人民公社の「①大・②公」という基本的な特徴があって、農村の生産力を高めることによって、貧困の根っこを断ち切るという闘いの、大きな基礎となったことはいうまでもない。

### あ と が さ

以上述べたように、生産手段と土地所有との調整が進められていくなかで、農業人民公社は総括のうえにも総括し、さらに批判と討議とを重ねて、ますますの大躍進を達成して行くのである。いま少し土地所有にその例をとってみると、城東人民公社第3生産大隊には現在13の生産隊がある。その第7生産隊は、第Ⅰ章に述べたように、かつては58世帯をもって1部隊を構成していた。ところが、人民公社が誕生した翌年の1959年に、城東人民公社内の生産隊の規模を調整したときに、分散していた土地と13世帯とが隣接する生産隊に調整されて、第Ⅱ章の第3節で述べたように、自由売買の件で組合を出ていった5世帯の富裕中農を差し引いて、40世帯をもって第7生産隊が組織されたのである。

この生産隊は、その後、3世帯増えて今日では43世帯となっている。土地所有の面でいうと、上級生産協同組合当時は約62ヘクタールあったそうであるが、規模の調整によって、食糧の作付面積約2ヘクタールを第6生産隊に、1.7ヘクタールを第5生産隊に、約1.3ヘクタールを第9生産隊へと調整されたので、第7生産隊の所有土地は約57ヘクタールとなった。しかし、城東人民公社の生産隊のなかでは、もっとも多くの土地を所有している生産隊である。こうして調整された第7生産隊は、基本的には生産を直接組織する採算単位であるから、当面の生産力の発展水準に適応したものでなくてはならない。述べてきた城東人民公社は、農業生産の機械化が絶えず高まっているが、手での労働もまだまだ相当に大きな比重を占めていた。それに、従来から木目こまかな農業生産をやってきているので、どちらかといえば、生産隊の規模はあまり大きくない方がよかった。

しかしながら、要は、社員たちの生活の安定が先決問題であって、生産隊の内部関係の調整を考えると、あまり小さすぎると、労働力と幹部の組み合わせがうまく行かず、畜力や農具を十分に整えることができなくなって、農業生産の面においても不利であることは明らかである。生産隊の規模の大小は、何はともあれ、社員のあいだの団結に有利でなければならなかった。前章に述べたように「六十条」の精神に従って、この城東人民公社では40戸の農家がひとつの生産隊をつくった。

この第7生産隊の場合は、隣接するその他の生産隊より約1.5倍ほどの土地を所有しているし、上海市郊外その他県のそれと比較して、生産単位では約2倍以上の土地を所有していることになる。したがって、他の生産隊に比べると、生産手段および諸条件が整備されているので、

経済的な面でも優位にあることはいうまでもない。したがって、生活の面においても、必然的に裕福な暮らしをしていたことが了解されるであろう。

ここにもう少し述べておきたいことは、前述した「六十条」を貫徹するための、もうひとつのかなり重要な内容ともいえる、いわゆる社員の家庭副業（養豚、家禽、乳牛などの飼育、野菜作りや茸・薬草などの栽培）についての政策を実行するということである。この副業生産をおこなう場所は、主として自留地（生産隊を基礎とした「三級所有制度」による公共土地のうち、もろもろの条件を考慮したうえで、0.5パーセントから0.8パーセントの割りで社員全員に分配して使用させる土地）であるが、第7生産隊の場合は、この自留地も他の生産隊と比べると多い。したがって、この副業生産は、社会の生産力がまだ十分に発展していない条件のもとでは、社会主義集団経済にとって必要な補充的部分であった。集団経済の絶対的優位を保証する条件のもとでは、社員が集団労働の余暇や休日を利用して、家庭副業を発展させるのを許すべきであって、また、励ますべきであると「六十条」は規定している。第7生産隊でもこの規定に従って、1戸当たり平均3.5アールの自留地を設けた。この自留地の政策が実施されたことによって、生産隊内の牧畜業などの副業が進展していった。このことが、社会全体の諸製品を増やし、社員の収入を増やして、農村の市場を活気づけるうえで大きな役割を果たした。それは、1959年以後のことである。

以上に述べてきたことは、中国の農村における貧しかった農民たちが、長い年月にわたって一部の特権階級の悪質な搾取にあい、人間としての最少限度の生存権保障である、衣・食・住の供給にさえおびやかされてきたその実態を踏まえて、その「貧困とのたたかい」の足跡なのである。とくに、1946年の土地改革の兆しに端を発し、一応の社会制度が実現するなかで、労働力や生産手段の組織化の過程を中心にして取り組んできた。こうした組織化運動のなかでかれらが得たものは、集団による農業生産である人民公社を成立させたということである。さらには、たゆまざる闘いが「六十条」などを制度化し、これが功を奏した1961年までの15年間の、農民運動を中心として述べてきた。しかも、それは搾取の根限でもある土地と生産手段との所有権をめぐる、この点に的をしぼって論じたのである。

未完

〔註〕

- 1) 『毛沢東選集』第1巻所収。
- 2) 同上、第2巻所収「中国農村における社会主義の高まり」中。
- 3) 『毛沢東著作選』481ページ。
- 4) 同上、510ページ。
- 5) 『中国プロレタリア大革命資料集成』第4巻、128ページ。
- 6) 同上、129ページ。
- 7) 同上、253ページ。
- 8) 同上、260ページ。

- 9) 同上, 261ページ。
- 10) 同上。
- 11) 同上, 311ページ。
- 12) 『毛沢東選集』第4巻所収「農業協同化の問題について」中。
- 13) 『中国プロレタリア資料集成』315ページ。
- 14) 同上, 316ページ。
- 15) 同上, 351ページ。
- 16) 同上。
- 17) 同上, 360ページ。
- 18) 『毛沢東著作選』531ページ。
- 19) 『中国プロレタリア資料集成』321ページ。
- 20) 「人民公社関係資料」嘉定県革命委員会。
- 21) 同上。
- 22) 同上。
- 23) 同上。
- 24) 同上。

#### 参考文献・資料

- 『毛沢東選集』第1巻～第4巻, 外文出版社刊。  
『毛沢東著作選』外文出版社刊。  
『中国プロレタリア大革命資料集成』第4巻, 東方書店。  
『人民画報』1961年4月～1964年3月号, 中国国際書店。  
『中国画報』1964年4月～1967年3月号, 同上。  
『人民中国』1967年4月～1981年7月号, 同上。  
『人民公社関係年表』嘉定県革命委員会。  
「人民公社関係資料」同上。